
僕と彼女と彼女の大切な場所

剣先

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女と彼女の大切な場所

【Zコード】

N7659X

【作者名】

剣先

【あらすじ】

幼い頃に両親をなくした神本悠斗は、普段から人間関係を築くことに何処か積極的になれないでいた。そんな悠斗は、入学した正林学園高校で学園理事長の娘である山女薫に出会う。初めて会った瞬間から金持ちの娘らしく不遜な態度をとる彼女は悠斗を半ば無理やり、天神荘という、自らが運営する共同の生活施設のような場所に連れて行く。そこで悠斗を待ち受けていたのは、管理人としての生活と、強烈な仲間たちだった。クラスメイトの内気少女の森内さん、その兄で風俗店経営者の猛さん、チャラ男兼ハッカーのマコさん。

そんな人達との生活が普通であるわけがない。

序章 僕と彼女の大切な場所

『吹き溜まり』

雪や落ち葉が風で吹き寄せられて、または海や湖沼で水の流れによって落ち葉等が運ばれて、体積している場所。インターネットで調べたらそう出てきた。

「この場所は吹き溜まりに例えるのが一番相応しいと思うんだ。決してゴミ箱やゴミ捨て場ではなくてね。ここに溜まっている奴等にとってココは本来居るべき場所じゃないんだ。本当にゴミ捨て場だつた方が幾分も救いがある。ただ一時的に、そしてどうしようもなく、ここに来てしまった奴らばかりなんだ。」

彼女が、前に呴いていた言葉だ。

「なんでゴミ箱の方が救いがあるの？ だってゴミだろ？」

あまりにも無知で無作法な僕は、ついそう訪ねてしまった。それを聞いた彼女は少し悲しそうな顔をして笑い、そしてそれからその表情を無理して塗りつぶそうとしているかのように、変に真面目な顔になつて優しく囁いた。

「それは自分の正しい居場所がわかつているからさ。ゴミはゴミ箱について。君だつてそれくらい小さい頃に習つただろ。しかし吹き溜まりにいる奴らにはそれがわからないのさ。自分がどこに行くべきなのかわからない。だから・・・だから吹かれて溜まる。それがどんなに悲しいことか君にわかるかい？」

いつもは口汚い彼女の柔らかな口調に僕は思わずドキリとする。それなのにこんなに寂しい気持ちになるのはなんでなのだろう？

「でも、ゴミ箱に間違えて大切なものを捨ててしまうことだつてあるよね？」

僕は彼女の説明を聞いても正直あまりわからなくて、頓珍漢な質問をしてしまう。

それを聞いた彼女は、驚いたように目を丸くした。キラキラと光る

彼女の瞳は、まるで月の輝きをビー玉サイズに押し込めたかのような不思議な色を放っていた。

「君は本当に面白い人だね。けれども確かに君の言つとおりかもしれない。でもだからこそ、こんな場所が存在しているのかかもしれないね。一時の。そして仮の居場所だったとしてもココは彼らに居場所を与えてくれる。もしかしたら学校に似ているのかかもしれない。3年なり4年なり決まった期間だけの居場所かもしれないけど、その場所はまさしくそこに通う人の居場所になることができる可能性を秘めているんだ。一番の違いはその終がいつも来るのか私たちにはわからないという点に尽きたんだろう。」

そしてまた彼女はこうも言つた。

「吹き溜まることで周りの流れを滞らせてしまっているのは、まぎれもない事実かもしね。ただ君には周りの流れに乗つて生きることが正しいだなんて思つて欲しくない。だってそうだろ？自分が望んでもいよいよくな流れに乗るくらいなら、ここに溜まっている馬鹿共のように、その流れに必死に逆らつている方が生き物らしいところなのだ。まあ人間らしいのかどうかは私にはわからないけどね。」

「人間らしい方が重要なんじゃあないかな？僕達は人間なんだから。」

彼女は僕のそんな言葉を聞いて、今度は声を上げて笑つた。

「本当に君は強い人間だ。相手にどんなにうまい言葉を並べられようとも物事の本質をつかむ力を持つてゐる。だからこそ君は僕たちの中で特別な存在なんだと思う。しかし私達は人間である前に生き物で有りたいと願つてゐるんだよ。こゝはそのへんの認識の違いなんだろうね。」

僕のことを強い存在という彼女の意見に、僕はわからないどころか、皮肉を言われているような気がして少しだけムッとした。だって僕はここに流れ着くどころか、彼女に手を引いてもらわなかつたらそんな仮の居場所さえ見つけることさえできなかつた間抜けな人間だ

からだ。そんな僕が強いわけないだろ？

しかしそれ以上に重要な事柄に僕は意識を支配されていた。僕の耳は確かに聞いた。確かに彼女が言った「私達」という言葉を。やはり彼女はどうしようもないほどに、彼等の一員なんだ。特別言葉に出して言つことはないが、そのことは彼女自身が一番わかつているはずだ。自覚があるはずなのだ。だからこそ、この場所は彼女にとつて大切な場所で、そして彼等にとつても掛け替えのない場所なのだと思う。

しかしそれは、余りにも寂しすぎるんじゃないだろうか。いつ訪れるかもわからない終を自覚しなければならないなんて。仮の居場所である必要がどこにある？ここが本当の居場所じや駄目なのかい？

「違うんだよ。違うんだよ。悠斗。」

僕の名前を呼ぶ彼女の声は、静かなに泣き叫んでいたような気がして、僕はハツとして彼女の顔をのぞき込む。

「だからこそ、この場所を私は必死になつて守るつもりしているんだよ。勿論いつかは私の力が及ばずこの場所を出ていかなければならないかもしれないし、もしかしたらこの場所 자체なくなつてしまふかも知れない。けれども。だからこそ僕達はこの場所を守ろうとしているんだ。無くなる可能性のないものを大切に思えるほど人間は謙虚にはできていないんだよ。永遠の居場所を見つけられる人なんてこの世にどれだけいるのかな？私にはわからないよ。」

その言葉で、初めて僕は彼女の言つていることが、なんとなくわかつた気がした。けどなんでなんだよ？君がこんなに悲しそうな顔をしてしているのは。

「別に何でもないさ。悲しい顔をせずにこんな話をしろという方が無理な話つてだけ。それとも君は、こんなに悲しい話をしているのに私に笑顔を強要するのかい？」

言つていることとは裏腹に彼女は既にいたずらっぽい笑顔を浮かべていた。

やめてくれよ。君は何時だつてそつだ。悲しい話をしているつて自

分で言うなら、無理に笑顔なんて作らないでくれ。なんで君ばっかり我慢するんだ？悲しいときは悲しい顔をして、泣きたい時は泣けばいいだろ。これは君が僕に言つてくれた言葉だ。それに結局逃げているだけじゃないか。今いる場所を失つたときに傷つくことから。しかし僕の中で生まれた不条理な気持ちは、言葉になることなく、きつく握りしめられた拳の中に虚しく消えていく。やはり僕は弱い。あの時の僕は、わかつていなかつたんだ。その彼女の悲しげな顔や、寂しげな作り笑いの本当の意味を。文字道理なにもかも全てわかつてなかつたんだ。これから、彼女に起つる事件も、僕達が立ち向かうことになるであろう事柄もひつくるめて。

しかしその話をするのは、またの機会にしよう。先ずは僕と彼女、そして彼等との出会いから話さなければいけない。僕がどうしようもなくこの場所に居場所を見つけるまでのその話を。

1章 桜色の出会い

それは僕が青林学院高校に入学して一ヶ月ぐらい経つた時のことだつた。その年の桜は異常気象の為か5月上旬だというのに、今だ、色鮮やかにもえていた。そんな季節外れな薄紅色と、雲ひとつない空が描く深海のような青で彩どられた部室棟の屋上で、僕達は出会つた。

「君は何をやつているんだい？」

その音は、大地より湧き出たばかりの湧き水のように冷ややかに澄み、低くもなく高くもないその色は、聴くもの心を穏やかにさせる不思議な音階を奏でていた。

まるで子守唄のようだ。

その声を聞いた僕は返事をすることも忘れて、それどころか振り返ることさえせずそんなことを考えた。

「私は、授業をサボつてこんな感じで何をしているのかと聞いているんだけど。」

その声色を全く崩さずに、もう一度彼女はそう言った。ハッとした僕は急いで体を起こして振り返る。

僕の視界に飛び込んできたのは、その落ち着いた声とは酷く不釣合な、幼げな容姿をした小柄な女の子だつた。涼し気な切れ長な目に、すっとした鼻立ちからは凛とした強さが感じられる。

鮮やかな桜色によく映える真っ黒なその髪はショートウルフとも言つのかわからぬが、今風な感じで短めに切りそろえられ、中性的な魅力を放つていた。

一陣の風が吹き抜けて、彼女の髪と少しだけ短めなスカートがふわりと風に舞う。

「それとも私に見えている君の耳はハリボテなのかい？」

僕は、作り物のような少女の造形に思わず見とれていた。

「あつ。えーと……。何をしてるって寝てたんだけど。」

ハツとした僕は、急いで言葉を並べる。

「ふつ。なんの捻りも無ければ、面白みもない答えだ。君が寝ていることぐらい見ればわかるさ。私は君と会話がしたいと思ったからこの質問をしたわけで、君はその意を汲み取つてもう少し気の利いた答えを返すべきだ。それが空氣を読むということだ。」

少女は、さも可笑しそうに吹き出した。

僕はそれを聞いて呆然としてしまう。全く失礼な話だ。何をしているのか聞くから寝てているという返事を返したというのに。よくよく考えれば、なんで僕はこんな初対面の少女の質問に真面目に答えてしまつたのだろう。そう思つとなんだかムカムカしてきし、自分自身が情けなくなる。

「面白みもないつて・・・。君の方こそ授業中にこんなところで何をしてるんだよ。それにココは高等部の部室等だ。君は中等部の生徒だろ？」

僕がそう言つと、少女は見る見るうちに顔を真っ赤に染め上げる。「ちょっ！なんて失礼な奴だ！！私は歴とした高校生だよ。君と同じ高校一年生だ。それとも君は女性を子供扱い出来るほど自分を大人だとも思つていいのかい？」

先程までの落ち着き払つた声が嘘みたいだ。そんな彼女の反応を見てむかついていたことも忘れて思わず噴出してしまう。

「ふふふ。ごめん、ごめん。僕あんまり友達もいないし、君が同学年だなんて知らなかつたんだ。ほら・・僕は視力も悪いから、よく見えなくて。君は何組なの？僕の名前は悠斗。一年四組だ。」

因みに視力が悪いというのは嘘である。僕の目は、先程彼女のスカートが舞い上がるのをしっかりと捉えていた。

「ふん。君に友達がないことぐらい見ればわかる。そんな悲しいこと私にいちいち説明しないでくれたまえ。まあいい・・・。」

彼女はまだ赤い顔を隠すように、下をむいてボソボソとつぶやく。酷い。確かに中学生と間違えた僕が悪かったけど、そこまで言わなくてもいいのに。てか、そんなに友達いないように見えるかな？

僕は彼女の言葉を聞いて思わずガックリ肩を落した。それを見て少女はやり返してやつたと言わんばかりにニヤリと悪そうな笑みを浮かべる。

「こいつガキだ。」

「私の名前は薰。山女薰。薰と呼んでくれて構わない。今君は私に何をしにきたのか聞いたよね？」

なぜか彼女の顔にはより一層いたずらっぽい笑が浮かんでいる。僕はその顔を見て思わずドキりをしてしまう。正直可愛いと思つてしまつた自分が悔しい。

僕は怖々とウンと頷く。それを見た彼女はニッコリと満足そうな表情になる。

「私は君に会いに来たんだよ。ここへ来れば君に会えると聞いてね。」

神本悠斗君。」

*

「これが彼女との出会いだった。これから僕の高校生活を。いや、高校生活どころか僕の日常を大きく搔き回すことになる山女薰との。」

「なんで僕の苗字を知ってるんだよ。さつき名乗ったつけ？」

「名乗つていないよ。君はそんなことも覚えていられないほど記憶力が低いのかい？そもそも会いに来たんだから、元々知つていたと考えるのが妥当だと思うのだけど。」

「じゃあなんで僕のことを・・・？」

「なんでって君が有名人だからに決まっているじゃないか。高等部から入ってきた変わり者が授業にも出ずに部室棟の屋上で昼寝してるってね。」

僕が通う青林学院は、内部生と言われる中学時代からこの学校に通う生徒達が所属する1～3組みと、外部生と言われる高校から入ってきた生徒が所属する4組からなる基本中高一貫の私立高校だ。1～3組は金持ちの良いとこの御子息・御息女ばかりで、反対に4

組は大概一般の世帯よりも貧しい家庭の子供たちが集まっている。

それはこの学校が、高校からの入学者に特別安い学費と寮、それに独自の奨学金制度を導入しているためだ。僕も学費の都合でこの高校への入学を決めた。

「えつ。本当に？田立ちたくないって思つてこないでソソソソ居るのに。」

僕は彼女に有名人と言われ正直焦っていた。なるべく人目を避けるためにこの部室棟でのんびりと過ごしていたというのに。

それを聞くと彼女は呆れたように目を見開いてこう言った。

「君は本当にそう思つてたのかい？入学早々授業をサボって悪田立ちしないわけないだろ？この学校ならなおのことだ。皆温室育ちの生ぬるい連中ばかりだから、君のことを不良と呼んで怖がっていたよ。かくいう私もその温室育ちの一員だ。四組の生徒達だって貧しくても勉強がしたいという真面目な連中が多い。」

正直、目からウロコだった。僕が通っていた中学は荒れに荒れていたため、いくら授業をサボろうとも田立つことなど決して無かつた。それどころか、たまにはサボらないと変な目で見られてしまうぐらいだ。

てか、この子4組の事を遠慮なく貧しいって言いやがった。しかしそれで不愉快になるといったことはなく、逆に僕は彼女の遠慮ない物言いに好感を抱いた。僕はそういう家庭の事情というか自分にどうしようもない事で同情されるのが大の苦手なのだ。相手が苦い表情を浮かべるのを見ると本当に申し訳ない気持ちになる。「でも僕が有名人だつたとして何で君は……。」

「薰と呼んでくれて構わない。」

わざわざ話を中断してまで名前で呼ばせるなんて。やつぱり口いソビう考へてもガキだな。

「何で薰はわざわざ僕に会いになんてきたの？だってそんな温室育ちの人たちが、不良に見られてる僕に用なんて無いはずだろ？てか、怖がられてたから僕には誰も話しかけてくれなかつたのか。てつき

りヒツソリと過ごせているものとばかり……」

僕はその事実に気がつきガックリと肩を落とした。そんな僕の様子を見て彼女は朗らかに笑う。

「ははは。僕が君に会いに来た理由なんて一つしかないだろ。面白そうだからだよ。それに、やっぱり君は面白い人だった。やはり私の目には狂いはないみたいだね。」

「狂いまくりだよ。だって面白いことなんて一言も言つてないもの。薫が勝手に笑つていいだけじゃないか。」

「別に面白い人っていうのはユーモア溢れる人のことだけを指す言葉じゃないよ。君は存在が面白い。あつ、だからと言つて別に君に笑いのセンスがないと言つているわけじゃないからガック力しないでくれたまえ。」

そう言つて楽しそうに近づいてきた彼女は、ポンポンと僕の肩を叩いてくる。不意に甘い香りが僕の鼻をくすぐる。

存在が面白いって、可愛い顔して何気にひどいこと言つな。

そんな事を考えて頃垂れる僕を嬉しそうに見つめたあと、彼女はこう続ける。

「この学校の生徒にこんなにも興味を持ったのは初めてだよ。うん。私は君が欲しい。」

僕はそれを聞いて、口をあんぐりと開け放つことしかできなかつた。心底言つてることが理解できなかつたからだ。もう少し順序を追つて会話をするということを覚えたほうがいいと思う。僕が欲しいって、僕自身をどうやってあげればいいと言うんだ？

「君は何時まで口を開けているつもりだい？私は君が……。」

そこまで言つと彼女の顔が、何故かみるみる朱に染まっていく。

「別に欲しつて言つるのはそういう意味で言つたわけじゃないからな。この場合の欲しいというのは……。」

全くもつて一人で忙しいやつだ。てか、このとんでも少女は何

言つてんだ？

「そういう意味つて？この場合つて？？」

僕は何を言つていいのかあまりにもわからなかつたので素直に聞き返した。

「馬鹿！もういい！！兎に角放課後またここに集合すること。私は遅かっただけなら怒るからね。」

そう言つと彼女はプリプリとしたまま階段を下り、校舎のある方角に戻つていった。

なんで僕が怒られなくちゃならないんだ。

勝手に来て勝手に怒つて帰つていった、台風のような薫を見送りながら、僕はそんなことを考えていた。

それに『怒るからね』って……まあでも放課後も特にすることなんてないし別に構わないか。

*

五時限目の終了を告げるチャイムを聞き、僕は教室に戻つた。

このまま午後の授業は屋上で過ごし、みんなが下校したあの時間を見計らつて、寮に戻るつもりでいたのだが、予定を変更して6時間目の授業に出席することにした。それは別に向学心に煽られての事ではない。

彼女が来たときに既に僕がいたら、元から居たとしても『早く来て張り切つて待つてたな。』と思われるだろう。そうなると妙に悔しい。

そう考えると僕はおちおち寝てもいられなかつた。

「ねえ、なんの授業？」

僕は隣の席の女の子に声をかける。本を読んでいたその子は急に話しかけられてびくつと肩を震わせると、

「ひやつ。・・・えつと・・・こ・・・ぐ・です。」

と遠慮がちに目を伏せて、小さな声でつぶやく。

おとなしそうなその少女は、サラっと肩まで伸びる髪とクリクリ

した目が特徴的な小動物のような外見をしている。この子は別に僕のことを特別怖がって、こんなに縮こまっている訳ではない（はずだ。少なくとも僕はそう信じている）。何故ならクラスのみんなに対しても、こんな感じだからだ。きっと物凄く引っ込み思案な子なのだろう。

「そう。ありがとう。えっと・・・。「めんなんて名前だけ?」

「・・・いえ。・・・あの・・・あつ・・・も・森内円です。」

「そつか。なかなか覚えられなくて。でも今覚えたから大丈夫。本を読んでたのにごめんね、森内さん。」

僕が彼女を怖がらせないようになるべく朗らかにそういうと、彼女は一瞬頬をカッと赤く染め、申し訳なさそうに、

「・・・いえ。」

とだけ呟いて、読んでいた本にまた目を落とした。

国語か。めんどくさい授業のときに戻つて来ちゃつたな。

僕はハアと深いため息をついた。正直言つて僕は国語の授業が嫌いだ。いや、嫌いというより苦手というべきかもしれない。もっと正確に言つならば、国語という教科が苦手なのではなく、国語の担当教師が苦手なのだと呟つべきだ。

国語の先生は新任の女の先生なのだが、兎に角熱心に授業を行つ。とても良い先生で生徒にも好かれているようなのですが、授業中に発言することを強いるこの人は、目立たないことを田下の目標に掲げる僕にとって天敵のような人なのだ。

「国語の授業、指されると発言しなきやいけないから苦手なんだよね。」

僕の独り言のような呟きを聞くと森内さんは、本を机にバンと置き、勢い良く身をこっちに乗り出してきた。

「わかります！急に指されて『問1の答えはー？』なんて元気よく聞かれても困っちゃいます。みんなの前で話そうとするワーツになっちゃうし・・・。」

この子近くで見ると、すくなく綺麗な顔してるな。

僕は不意なことにビックリしたのと、女の子に急に近づかれたのとで思わず目をそらしてしまった。

「…………」

僕の反応を見て、彼女は冷静さを取り戻したのか顔を真っ赤に初めてワナワナとしたあと、バツと机に顔を隠すように突っ伏してしまった。

「全然謝らなくていいから！ねつ！？」

僕が取り繕うようにそう言つても森内さんは恥ずかしそうに目を伏せて『ごめんなさい。』と村人Aにでもなったかのように謝り続けるだけで、それっきり答えてはくれなかつた。

運が悪いことに、この授業のうちに3回も指名された森内さんは、そのたびにバツが悪そうにモジモジと黙り込んだ後、渋々といつた様子で申し訳なさそうに蚊が止まるような小さな声でなんとか答えっていた。その痛々しい姿はとても健気で、僕の保護欲を強く掻き立てた。

*

授業と掃除が終わり、僕が部室棟の屋上に戻ると、すでに薫は放置されたタイヤに腰掛けて不満そうな顔で待つていた。僕は目立たないので、一際一生懸命に掃除をこなしてきた。その為HR終了後すぐという訳にはいかず、少し遅くなってしまった。この部室棟の屋上には、タイヤから飛び箱まで、不要になつたものの捨てるには忍びないようなものがゴロゴロ転がつている。

「遅い！私より遅かつたら怒ると言つたじやないか。やっぱり君の耳はハリボテだつたんだね。犬のマイクだつて私の言つことをしっかり聞くというのに。」

開口一番薫は憎まれ口を叩いた。

「『めん。でも掃除をしてたら遅くなつちゃつて。てか犬と僕を一

緒にしないでよ？」

「確かにそうだね。本当に失礼なことをした。帰つたらマイクに謝らなくちゃ。」

「マイクにかよ！――」

僕は思わずつっこんでしまった。

クソ。こういう奴に大きなリアクションを取つたら負けだ。余計に喜ばせてしまつ。

僕はそう自分自身に言い聞かせて、冷静を取り繕つ。

「で集合したけど何か用なの？」

「用があるから呼んだに決まつているじゃないか。追ってきたまえ。」

薰はそう言つと、こちらを振り返りもせずトントンと軽快に階段を下つていつた。

そもそもなんでこの子はこんなに偉そなんだろう？

「おい、早くしな！置いてくよ。」

薰はうまんそうな顔をしてこちらを振り返る。

「ハイハイ。今行きますよ。」

僕はため息をついて階下に向かつて言葉を投げた。

「ハイは一回。」

ハアと僕はもう一度ため息をついく。

「ハイハイ。ごめんなさいね。」

上機嫌な様子でぴょこぴょこ歩く彼女のあとを僕はムツツリと黙り込んで、ついて行つた。しかしつつまで経つても目的地につく様子はない。僕がどこに行くのか訪ねても彼女は不敵に笑うだけだった。この少女の人を食つたような態度は僕のタイミングというカリズムを狂わせる。

「ねえ、どこまで行くの？ 内部生の君にそんなこと言つのも難なんだけどこれ以上進んだら学校から出ちゃうよ。」

体育館の角を曲がればもう校門しかない。それでも彼女は一向に僕の質問に答える素振りを見せらず、いよいよ校門をくぐるといつきになつてやつと口を開いた。

「誰も校内に目的地があるなんて言つていないとと思うのだが？」

「ちょっと待つてよ。僕の寮は校内にあるんだけど……」

正直に言つて僕は校外に出るのが恐ろしいほどに億劫だった。そんな僕の露骨に氣だるそうな態度を見ても彼女は全く氣に止める素振りを見せない。

「そんなものは知らないね。たまには君も外出したまえよ。休日も含めてずっと寮の部屋に引きこもつているそうじゃないか。だから入学して一ヶ月も経つというのに友達の一人もできないんだ。」

「なんで薫がそんなこと知つてるん……てか、余計なお世話だ。」

「そう言つてそっぽを向く僕を見て彼女は嬉しそうに微笑んだ。
「いい反応だ。そういう反応をとつてもらえると私も嬉しい。」

「しまつた。またリアクションをとつてしまつた。」

僕はチツと小さく舌打ちする。

そんなふうにくだらないやりとりをしながら歩いているとすぐに目的地に着いた。いや。正確には第一の目的地とでも言ひべきか。学校最寄の『五日原駅』である。

「つて駅? 何で駅なの? 駅つて事はもしかして電車に乗るの?」

「ちょっと待つてよ。僕は絶対嫌だからね。」

先程は態度で示しても伝わらなかつたようなので、今度は言葉に出して『面倒臭い』ということをはつきりと伝える。

「大丈夫。たつたの一駅だ。何を隠そう僕達の目的地は戸富駅だからね。なんだつたら歩いても行ける距離だよ。それに君がこれから毎……。」

「いや、一駅とか関係なく面倒くさいんだけど。ほら、僕宿題しなくちゃいけないし。」

僕は咄嗟に小学生レベルの嘘をついた。

「今日宿題でてないつて4組の人人が言つてた。」

彼女はジト目でそう言つと、僕の手を引っ張つた。

「ほら、御托はいいから行くよ。」

僕はその手を振り払う事もできず、なすがままに引っ張られていく。

実際に目的の駅は一駅先にあった。2分程度で到着したので歩いてもいけるというのは本当の話なのだろう。しかしだからなんだと言つんだ。

「まったくもう……。」

僕はやや諦めも入り、首を左右に振る。

それにしても違う街に来たのも、かれこれ一ヶ月ぶりくらいだなあ。

僕は入学以来、できる限り学校の中で過ごしていた。どうしても、なにか買う必要があり、外に出なくてはならない時でさえ五日原野駅直結のショッピングモールで済ませた。校内に本屋と売店くらいはあるし、インターネットショッピングで事足りたため、実際にわざわざ出向く必要性もなかつたのである。

僕はこの街の人間ではない。さらに言えばこの街の人間でもない。小さい頃から孤児院で育つた僕には家というものがいないし、ホームというものがない。勿論今まで面倒を見てくれた美咲園の園長の事は大好きだし、どれだけ感謝しても足りないくらいの恩がある。美咲園がホームなんじゃないかと言われれば、もしかしたらそうなのかもしれない。しかし、だからこそ僕は早く独り立ちしたかった。だからこそ僕は学費の安い青林に進学した。進学するしかなかつたのだ。

けれども『しかなかつた』からと言って、この高校に入学したくなかつたというわけでも、この街に来たくなかつたというわけでもない。はつきり言って、どちらでも良かつた。早く独り立ちできれば本当にそれでよかつたのだ。

早くバイトも見つけないとなあ。

僕は、戸富駅から出るとそう考えながら口の傾きかけた空を眺めた。この駅がある商店街の名を告げるアーチと、両脇にズラリと佇む店々で空がとても狭く感じた。行き交う人々は皆生活感が滲み出ている

て、街には観光ズレした雰囲気もない。まるで東京とは思えないような雰囲気だ。

近くにこんな場所があつたんだ。

如何にもココは東京ですといった僕らの学校がある場所から、たつた一駅電車に乗るだけでこんな所に来れるなんて思つてもみなかつたため、実のところ僕の気分はほんの少しだけ高揚していた。

「何をしているんだい？早く着いてきたまえよ。こんなところでボーッとしていても得られるものなんて何もないと思うよ。」

「はいはい。どこまでもお供いたしますよ、姫。」

僕は半ば投げやりに答える。

「ちょっと、君。今なんて言つた。わっ・・たしが姫だつて！？」

「えつ！なんで！？薰はお姫様みたいな感じだと思つし、いいじゃないか。實際にお人形みたいな容姿をしているんだから。あつ、でも實際は姫が綺麗だとは限らんのか。」

「きつ・・君は自分が何を言つているのかわかつているのかね！？よくもそんな恥ずかしいことをヌケヌケと。出会った初日からこんなことは言いたくないが、君はそう言つ無自覚で馬鹿なところを直すべきだ。」

薰は涙目になつて手近に植えてある街路樹から葉っぱを鷲掴みでむしり取ると、それを僕に向かつて投げつける。

「わっ、急に何するんだよ。」

「つるわー。『何』と聞きたいのはこいつの方だ。・・もつといつ。早く行くよ。」

そう言つと彼女は早足で歩き始めた。足の回転数はすく多く多いのに、あんまりスピードが出ていないのは彼女が小さく、歩幅が短いからであろう。

黙つて彼女のもとを歩くこと数分、僕達は商店街を右に抜け、左手に現れる公園の手前を曲がつた。

急にこんなに静かになるんだ。本当に東京は面白い街だな。

まだ5分と歩いていないのにもう先ほどの商店街の喧騒が嘘のよ

うである。

すると薫が急に打ち放しの外壁のコンクリートの建物の前で足を止める。少しだけ寂れた雰囲気をかもし出すその建物は、妙にきれいな長方形をしている。なにかの会社か何かなのであらうか？

「着いたよ。ここが私たちの目的地だ。」

「えーと、ここは何！？」

「天神荘。僕達の城で、これから君の城にもなる場所だ。」

「君達の城？僕の城？なんだよそれ！？」

「まあいい。早く中に入ろう。皆に紹介したい。」

そう発すると薫は扉に手をかけて、

「ただいま。」

と言い、押し放した。僕はそんな彼女に慌てて着いていく。ん？ 今ただいまって言った？

中はロビーのような空間があり、そこに置かれたソファーにはいかにも優男といった風体の細身の男が浅く腰掛けて本を読んでいた。「あっ、おかえり、薫。って、どうしちゃったの？ 男の子なんか連れてくるの初めてじゃないか。」

うわっ、きれいな顔。まるで女の子みたい。

「余計なことを言つた、マコ。」

「でも本当のことじやないか。ついに薫が彼氏を連れてくるなんて兄としてうれしいよ。」

「か・・彼氏ではないし、私に兄弟などいない。そもそもこいつとは今日初めて話したばかりだ。」

「うわー。今日話したばかりの子を家に連れ込むなんて薫も大胆だね。」

そういうとマコさんは、にっこりと微笑んだ。しばらくの間真っ赤になつてパタパタとする薫と、一瞬一瞬しながら薫をからかうマコさん？ を眺める。

打ちっぱなしのコンクリートに、シンプルながら存在感のある家具。デザイナーの事務所のようなおしゃれな空間で言い争う女子高

生とチャラに男の様子はものすゞゞスマッシュであった。

「えー、と・・あの?」

何時まで経つても終わりそうも無いので僕は遠慮がちに話を遮る。
「あつこめんね。僕の名前は間島真琴。みんなは、マコって呼んでくれてるよ」

振り向いたマコさんがこれでもかといつぱりの爽やかなワインクを放つ。

「何が　だ。。。氣をつけたまえ悠斗。こう見えてもマコは性質の悪いハツカ一で、情報屋のような仕事をしている。」

「もう薰、あんまり褒めないでよ。それに君だつて性質の悪い守銭奴じゃないか。」

そつこいつとマコさんはべつと舌を出す。それを見た薰はチッと舌を鳴らしながら憎憎しげに睨むみつける。

「えーと、僕の名前は神本悠斗です。悠斗でいいです。」

僕も短く自己紹介する。

「マコ。こいつが話していた面白そうな奴だ。」

薰が手短に僕の情報を付け加える。ん? 昨日???

「ああ、この子が・・・。しかしその日には連れてくるなんて薰は本当に待つということができるないんだね。悠斗君もいきなり連れて来られて大変だったでしょ?」

そういうながらマコさんは品定めするかのように手を締めて僕を見つめてくる。

なんだかこの人に見つめられると落ち着かないな。

「うん、いかにも薰が気に入りそうな子だね。これからようしくね、悠斗君。」

一通り僕を眺め回し終えたマコさんはさつまつと右手を前に出して握手を求めてきた。

「よろしくお願いします。」

僕はそれにおずおずと応じる。その様子を薰はなぜだか満足そうに眺めてくる。

「そう言えば薰？悠斗君の部屋はどこにするの？確かに303号室が開いてたと思うけど。ただ3階は女の子用だし。」

「心配要らない。悠斗には一回の管理人室を使つてもいい。」

「何をこの人たちは話しているのだろうか？僕は管理人室を？つて、さつき『ただいま』つていつてたし……。」

「えつ、てことは悠斗君は管理人として入つてくれんの！？やつたー。これで、輪番で掃除とかやらなくて済むね。」

「ああ。その代わりこいつの給料ぐらいは私たちの方で負担することになるよ？」

「俺は全然かまわないよ。」

「当の僕をそつちのけで、2人は楽しそうに話している。

「って僕をここに済ませる気？それも管理人として！！」

「薰の思惑にやつと気がついた僕は急いで口をはさむ。

「ちょっと待つてよ。僕はこの前学校の寮に入寮したばかりなんだよ。そもそもそんな話は聞いていないよ！！」

僕の叫び声を聞いて二人はぽかんとした顔でこっちを振り返る。それから同時にニヤリと不敵な笑顔を浮かべる。いつたい何だと言うんだ。

「じゃあ今話そう。君はこれからこの天神荘で管理人として過ごすことになる。心配要らない。もう学校の寮のほうには話をつけておいた。」

「僕は薰の傍若無人ぶりに言葉を発することすらできない。

「やっぱり何も話さず急に連れてきたんだ。薰はいつもそうだよね。けど薰はしつこいから諦めた方がいいよ？」

「何を言っているんだい、マコ？急ではないよ。僕は三日前に、部室棟に這い上がっていく悠斗を見たときから目をつけっていたんだ。全然急ではないよ。それからの三日間は本当に忙しかった。こいつの個人情報を調べ上げることとか……。」

「ああ。だから急に管理人室の掃除を始めたりしたんだね。それに薰が実家に帰るなんておかしいと思つたよ。けどそれじゃあ悠斗君

には何も言つてなかつたつてことじやないか。」

マコさんがなんとなくフオローしてくれているのだが感情が入つていなことがよくわかる。本当にこの人たちは何を言つてるんだろうか？

「なんで君が寮に話を通すんだよ。そんなことでき……。」

ふと我に帰つた僕は必死に糸口を見つけて、口を挟む。

「薫の苗字を思い出してみて？」

マコさんにこやかに僕の言葉をさえぎる。

「えーと、や・・まめ？ 山女！ って学長と同じ苗字ぎやないか。」

僕は驚きのあまり囁んでしまつ。なんて惨めなんだ……。

「ふふつ。『ぎやないか』だつて？ 聞いたか、マコ？？」

「うん、聞いた聞いた。今完全に囁んだよね。」

二人はさも可笑しいといった様子でクスクス笑つてゐる。

「いつらふざけやがつて……。それに今僕の個人情報とか、実家に帰つたとか言つてたけど、それつて……。この野郎！ ！ ！ 「だからなんだつて言つんだ。僕が嫌だつて言つたらそれまでじゃないか。」

僕は思わず叫んだ。とりあえず訳はわからないままなので、気合ぐらいで負けては駄目だ。

「そうかもしけないね。けどこれでどうだろつ。君がこの荘の管理人をやる代わりに、居住費、光熱費、食費は僕達で負担しよう。それにプラスして月々三万円の給料を支払おう。管理人をすればバイトもできないだろうしね。寮費の一万元と寮食費の一万元、つまり合わせて二万円が浮いて給料まで手に入るんだ。お金のない君にとつて悪い話ぢやないだろ？」

「・・それは・・・。」

正直美味しい提案だとは思つた。しかし大人しく従つのが癪だつたし、なによりも急展開過ぎて頭の回転が追いつかなかつたのだ。

「それとも、もしかして私と暮らすのは嫌かい？」

僕が長い間機能停止して目をパチクリさせていると、薫が急に不

安そうな表情をして僕の顔を覗き込むよつとして上田使いで見上げてきた。

「うつ、そんな目をされたら……。

「えつと、嫌だってわけじゃないけど……。

僕が思わずそう言つと薫はパッと顔を輝かせる。

「そうか、そうか。嫌じゃないか。じゃあ決まりだな。」

「悠斗君。薫もこんなに嬉しそうにしているし、君も特に寮にこだわりがあるわけでもないだろ。それに薫が目をつけたってことは、どうせ特に行く当てもない無いんだろうし。この荘には帰る場所も無いような人しか居ないからね。」

この人も綺麗な顔してはつきりと物を言つた。まあ行く当ても無いのは事実なんだけど。てかマコさんは何を言つてるんだ?あなたはどうか知らないけど、薫は学長の娘だろ?無いどころか立派な家があるはずだ。

「そうだ! 薫。悠斗君を上に連れてつてあげたり? 時間的に調度だと思つんだけじ。」

そう言つてマコさんは壁にかけてある時計を指差す。

「うむ、そうだな。もう六時過ぎか。ついてきたまえ、悠斗。」

薫はそう答えると僕の返事を聞くこともなく動き出す。僕はここで逆らつても意味がないので、さっさと階段を登り始める薫に大人しくついてキッチン右にある階段を登つていぐ。

「あつ、俺仕事するから部屋にこもるね。ご飯になつたら呼んで頂戴。」

登り始めた僕達に下からマコさんが大声をだしている。

「この建物はもともとデザイン事務所として使われていたんだ。その会社が倒産して使われなくなつたのを買い取つて改装した。なかなかいいだろ?」

薫と僕は飾り気の無い灰色の階段をズンズンと登つていぐ。

「だからロビーなんかもあるんだね。そうでなければ普通あんな広いスペース作らないもんね。」

一階にたどり着くと、一旦足を止めた薫がこちらを振り返る。

「そういった所だ。ここが一階で男子用のフロアだ。今は居ないがマコを含めて三人の住人がいる。」

そう手短に告げると、また階段を登り始める。前を登る彼女の短めのスカートが足を動かすたびにひらりと動く。

「でここが三階で女子用のフロア。私を含めて一人だ。まあおいおいその辺りは案内するとして・・・」

そう眩いで薫は更に足を進める。すると重厚な鉄の扉が目の前に出現する。その踊り場で彼女はやっと足を止める。スカートから伸びる足の白さが眩しい。

「さあ、ここだ。君の手で開けたまえ。鍵を回してから頼むよ。」
彼女は得意げな顔をしてこちらを見下ろしている。

「ん。」

僕はゆっくりと階段を登りきり、おもむろに鍵を回す。

なんか、案内までされちゃってどうしよう。まだここに住むなんて一言も言つてないのにな。なんだか既成事実を作られて結婚を迫られる男の気持ちがわかつた気がするよ。

ハアと僕はため息をつき、ドアを押し開いた。

「うわあ。」

僕は思わず感嘆の声を上げる。先程までのモヤモヤするような感覚は瞬間に吹っ飛ぶ。

目の前には、遠くになるに連れて段々と背の高くなる建物と、東京とは思えない広い広い空が広がっていた。近所の公園で遊ぶ子供たちの声が聞こえる。

その遠くに見えるビル群には、目で確認することのできるほどのペースでみるとうちに夕日が沈んでいく。その沈み行く夕日に染め上げられた空の向こうには絵の具をしませたような雲が流れている。

「なかなかのものだらう。少しはここで暮らすのも悪くないって思つてくれたかい?この辺は民家が多いから少し上に登るだけでも一

気に空が広くなるんだ。それなのに向こう側はまるで摩天楼だ。その摩天楼の一角に僕達の学校がある。

そういうた彼女はどこか自慢気な表情をしている。薫は屋上の淵まで歩いていくと、柵にもたれ掛かりながら嬉しそうに夕日の方角を指差す。僕もその後に続いて歩く。

正直に言つてもう意地を張るのも馬鹿らしくなつていたし、寮でバイトをしながら生活するより、明らかにこちらの方が効率が良い。それにこんなに心が躍つたのも久しぶりだというのも認めざるを得ない事実である。

「そうだね。毎日こんな夕日が見られるのなら悪くないかもね。さつきは意地になつてああ言つたけど、そもそも僕に断る理由なんて無いよ。どこで暮らそうが関係ない。生活スペースとバイトを同時に得られるなら渡りに船さ。むしろ薫達の方こそいいの？僕は心中ではこんなにも利己的な考え方をしているんだよ？」

僕がそう言うと彼女は寂しそうに笑つた。

「始めはそれでも構わないさ。ここはね・・すごく不安定な場所なんだ。ここに居る奴等は誰もが望んでここにたどり着いた訳じやない。さつきのマコだつてそうだ。皆どうしようもない何かを抱えている。どうしようもない理由に押し流されてここまで来た。この吹き溜まりのような場所で滯つているんだ。」

「それじゃあ、ある意味僕にピッタリかもね・・・。」

それを聞いて彼女はより一層悲しそうな顔をする。

「ピッタリじゃない奴がこの世に居ると思うかい？」

僕はその言葉を聴いて思わずハツとした。つらいのは僕だけじゃない。誰もが誰も大なり小なりのなにかを抱えて生きているんだ。なんだか僕は自分が恥ずかしくなつて俯いた。

「なんで僕を誘つてくれたの？」

薫は表情無く、遠くに見える建物を眺めている。

「私が君を気に入つたからじゃ駄目かい？これ以上話したところで何の益も無い話になる。ただ私と君の深部を抉るだけだ。それに君

を気に入っているのは本当だよ。それでも話せと君が言うならば私はあえて話すとしよう。」

「の口ぶりからすると、きっと彼女は理由あって僕を誘ってくれたのだろう。しかし彼女が言わないというのならば、それで構わない。彼女は僕のことを『気に入っているのは本当だ』と言つてくれているのである。

「いや。薰がそう言つのなら、それで十分だよ。」

「ありがとう。」

彼女はぼそりと呟くように言った。

それから僕は淡々と自分の話をした。

僕にとって家族が居ないということは当然の事で、人からその話をされてもなんとも思わない。けれども相手が申し訳なさそうな表情をするのが何とも居たたまれず、普段はなるべく自分からは言わないようになっていた。

それなのに何でこんなところで自分の身の上を話したのかわからぬ。それも今日会つたばかりの少女にだ。今考えればまったくの謎である。

それでもそんな聞いても何の面白みの無い話を、彼女は表情一つ変えずに、黙つて聞いてくれた。普通なら顔を曇らせてしまつような話を。

「つまらない話を聞かせちゃってごめんね。暗くなるだけだよね。」

僕がそう言うと、彼女は必死な様子で、

「つまらなくなんかない。つまらなくなんか……。そんなこと言わないでくれ……。」

と反応する。

そういう彼女の声はなんだか今にも泣き出しそうだった。そんな彼女らしからぬ様子に僕は思わず面食らつ。

少しの沈黙が時を支配する。

「本当に僕がここに来ても良いの?」

それを聞いて彼女はゆっくり、こひらへ振り返る。とてもとても穏

やかな顔をしていた。背後では太陽がビルの背後に完全に沈み、その残像と言えるぼわっと覆うような、暖かい橙色の、漏れ出た光が辺りを包み込んでいた。それはすゞくやさしい色をしていて今度は僕が泣き出しそうになる。

再度沈黙が時を支配する。

「あたりまえだ。私が君を誘つたんだ。天神荘によつこそ。管理人さん。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659x/>

僕と彼女と彼女の大切な場所

2011年10月20日20時17分発行